米人メンバーが、神道を religion として把握する困難をさまざまな面から指摘した。神道に道徳律がないこと、とりわけ神道の最重要文献と目される『古事記』に道徳の体系や倫理的問、儀礼、神についての崇拜対象としての扱いなど、彼らが religion の要件と考えるものがことごとく欠如していると認識されていた。これらの論点をサトウなりに受けとめ、純神道リバイバル派を対象として神道の religion たる性格を再度考えようとしたのが、Pure Shin-tau 論文である。サトウは、のちに国学で「四大人」と定式化される人々の動きを純神道の revival (信仰復興) ととらえる。記紀や万葉集、古語拾遺、祝詞には純神道の研究者に有益な資料がそれぞれ別個に含まれており、彼ら四人はこれらを研究したいわば先達と理解している。サトウによるこの四人の選択は、全体の構想が篤胤の枠組みに依拠したものであることを示す。論文の内容は、四大人を順次紹介していくものであるが、実際の記述には宣長や篤胤の著書の祖述的な部分が多くみられる。むしろ、大半は紹介と要約であるとさえいえる。ただ、篤胤を論じた末尾の部分では、『玉櫛』に含まれる諸神に対する拝礼と言葉を記した神拝式を紹介した上で、神道の religion としての性格をここに見出す。サトウは、篤胤が神道の基礎に立脚したひとつの religion を確立しようとしたと把握するのである。

結論では、四人の学問について神道という religion の正しい理解かどうかは判断しないと断った上で、方法について考察する。純神道を説明するためにサトウが必要と考えるのは、神代に関わる資料について聖書解釈や神話解釈が経験したような

複数の資料を相互比較しつつ歴史的批判を行うことである。「四大人」の学問にもそうした方向性がある点を評価はしているが、古代の記録を絶対確実視することや奇跡や超自然的なものに立脚している点に方法的な限界があるとみる。サトウは、神道は religion として把握できないという理解を修正しつつ、しかしインサイダー的な視点には批判的な態度をとるのである。

これまで、サトウの神道に関する知識の源泉については、日本語教師をつとめていた林甕臣が想定されてきた。甕臣は確かに明治三年に平田門に入門している。ただ、サトウとの交際の期間の長さや関係の密接さから考えると、幕末から気吹舎と関係を持っていた薩摩藩の関係者に注目すべきであろう。サトウと親交のあった西郷隆盛は、嘉永年間から気吹舎に入入りしており、西郷自身の入門はないが、薩摩藩関係者が複数入門している。薩英戦争の際にイギリスとの交渉にあたった岩下方平もその一人で、安政年間の入門である。サトウが、彼らを通じて平田学の知識や書籍を入手していた可能性は大いに考えられる。

近代日本における大祓詞の解釈

鈴木 一彦

本研究は、生命主義的思想との関連で、大祓詞などの古典の実証研究を通じて、神道における始原的本質としての呪術的宗

教性に回帰していく流れと、神人合一といった祓の思想を更新させ、民衆救済のための新たな呪術的宗教性を、今の世に打ち出していく流れという二つの流れの緊張関係と相乗効果によって、具体的に、どのように日本の近代化に堪えうる新たな呪術的宗教性が創出されたのかについて究明を試みようとした。

そこで、近代の代表的な大祓詞の解釈の一つである今泉定助(一八六三—一九四四)の『大祓講義』を取り上げ、その解釈内容から、古学神道家(国学者)によって『延喜式』所収の大祓詞の解釈が行われることで、中世から近世にかけて広く普及していた中臣祓の解釈に、どのような視点が加わったのかについて考察を行った。

まず、今泉が講述した筆録をもとに昭和一三年に刊行された『大祓講義』には、中世から近世にかけて広く普及していた中臣祓の解釈に相通ずる大祓詞の解釈がある。それは、両部神道書『中臣祓訓解』にある、煩惱を脱却することで、本来の清浄な心が現れるという如来蔵・自性清浄の思想や、吉田神道、伊勢神道、垂加神道などの中臣祓の註釈書にある、個人祈願に込めるといった現世利益のみならず、神や天地万物と合一するという神人合一の思想などである。

この中臣祓とは、個人祈願のために用いられた奏上体形式の祝詞であり、『延喜式』所収の大祓詞は宣読体形式の祝詞であった。前述の通り、伊勢神道や吉田神道では、仏教における如来蔵・自性清浄の思想的影響が加わり、中臣祓の読誦を通じて身体的清浄のみならず、心の清浄が尊ばれるようになり、さらに、朱子学の影響により、垂加神道では、中臣祓の読誦は神人

合一のための修養方法の一つとして尊重されてきた。しかし、古学神道(国学)の誕生により、それまでの中臣祓の解釈は、再び記紀をはじめ二季恒例の大祓における禊祓の解釈に基づく大祓詞の解釈に立ち戻ることになるが、その一方で、中世以降、中臣祓が担ってきた個人救済といった宗教的意義や役割を新たなかたちで再構築しようとする思想的潮流が生まれることになる。

今泉の『大祓講義』からは、そのような、『延喜式』所収の大祓詞など古典の実証研究を通じて、神道における始原的本質に回帰していく流れと、神人合一といった禊祓の思想を更新させ、民衆救済のための新たな宗教的意義や役割を、今の世に打ち出していく流れという二つの流れを読み取ることができる。また、近世末期にかけて広く普及していた勤勉といった通俗道徳の一端が、大祓詞の解釈の中で再構築されている。

そして、ここで重要なことは、「公(おおやけ)」の祝詞である『延喜式』所収の大祓詞を解釈するにあたって、近世までの中臣祓の解釈を更新するかたちで継承していることである。すなわち、古学神道以降の大祓詞の解釈は、「公」という視点から、近世までの中臣祓の解釈を捉え直したものと言い換えることが可能ともいえる。

このことから、古学神道家によって『延喜式』所収の大祓詞の解釈が行われることで、近世にかけて広く普及していた中臣祓の解釈に「公」の視点が加わったことが、日本の近代化に堪えうる新たな呪術的宗教性を創出する重要な要素の一つとなったのではないかと考えられる。